長期安定に関与する要因を考える－舌位や咬合平面など－

日本大学歯学部歯科矯正学講座主任教授
本吉　満

【略歴】
1984 年　日本大学松戸歯学部卒業
1990 年　歯学博士（日本大学）
1996 年　米国アラバマ州立大学歯学部客員研究員
2004 年　日本大学歯学部歯科矯正学講座講師
2008 年　日本大学矯正歯科学会専門医（現 臨床指導医）
2009 年　日本大学歯学部歯科矯正学講座准教授
2018 年　日本大学歯学部歯科矯正学講座教授

矯正歯科治療後の安定性には様々な要因が関わっていますが、この中で特に舌位や咬合平面、下顎下縁平面傾斜の変化は重要な関連因子であると考えられます。

不正咬合の改善のため、小臼歯抜歯を伴う治療を選択する症例が多くみられますが、上顎前突傾向やハイアングルを示す症例において、大臼歯に最大の固定を適用する場合、歯科矯正用アンカースクリューを用いた治療計画を立案することも少なくありません。このような症例に対して上顎歯槽部のアンカースクリューを用いた場合、上顎大臼歯の圧下により下顎骨の反時計回りの回転が起こる場合があり、また、下顎骨の前方への移動によって下顎骨に付着している舌骨上筋群である顎舌骨筋や顎二腹筋などが前上方に引き上げられ、舌骨は前上方に移動するとした研究報告があります。加えて、下顎骨や舌骨の前上方への変化により、上気道は拡大するとの報告もあります。

そこで今回はまず、歯科用コーンビーム CT（CBCT）と側面セファログラムを用いて矯正歯科治療前後の舌位の評価を行い、前歯の後退量との相関について比較検討した当講座の研究結果を基に、長期安定への影響について考察したいと思います。

一方、下顎下縁平面傾斜角は咬合力や咀嚼筋の走行方向に影響を受けることが知られており、咬合平面もこれに強く影響を受けることは明らかです。これら下顎下縁平面や咬合平面の傾斜角は、顎間ゴムやヘッドギア、アンカ―スクリューなどの使用により容易に変化します。そこで今回は、治療目標とすべき咬合平面の垂直的位置に関して私見を述べさせていただければと考えています。

長期安定に関わる要因を少しでも明らかにすることによって、「審美的にも機能的にも良好で長期に安定し得る治療結果を得て、患者の末永い健康と幸福に寄与すること」とした本研究会の主旨に沿った解答を得るために、会員の皆様と共に考察する機会となれば幸甚に存じます。